
英雄王に拾われし子

七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄王に拾われし子

【Nコード】

N1481Y

【作者名】

七瀬

【あらすじ】

Fate/zeroの最後にギルガメッシュに拾われた赤子の話。

もちろん二次創作であり、原作は一切関係ありません。

亀更新ですが、どうかお付き合いください。

「雑種よ、我が気まぐれに預かったことを光栄に思うがいい……千代先まで誇れようぞ」

始まり

辺りを埋め尽くすのは黒い炎。

道にあるのは死体の山。

さながら地獄絵図である。

そんな中、悠々と闊歩する男がいた。

満身創痍でありながら、しかしどこか高貴な雰囲気をかもしだす金髪の男。

自身から流れる血には気も止めず、この地獄絵図を見て回っている。

「受肉、とはなんたる感覚か……なんとも言いがたい」

男は己を確かめるかのように歩みを進めた。

そして、すでに死んでいる母親らしき死体に守られるようにして安らかに眠っている赤子を見つけた。

王の気まぐれ

赤子を片手に抱え、男は考えた。

「なぜ我はこのような雑種を拾った」

男の手に抱かれ、すやすやと寝息をたてている赤子は、何が起きているのか全くわかつてはいないのだろう。

「……わからん」

男はしばし赤子を眺めたあと、呟くように言うと、また歩き出した。

「パスは……切れているか……肝心なときに使えんヤツだ。まあ、いい。ならば暫しの観光とするか」

男はどうでも良さそうに、しかし赤子は手から離すことなくまた歩き出した。

英雄と赤子

災害地から抜け出した男が最初にとった行動は住居の確保だった。

適当な家にズカズカと入り込み、リュックいっぱいのお束を投げすていい放つ。

「今からコレは我の物だ。金はくれてやる。今すぐ失せろ、雑種」

家主は何事かと思ったが、目の前の大金に抗うすべはなかった。

こうして比較的大きな家を手にいれた男。

しかし彼は満足はしなかった。

「この程度の家でわずかながらとはいえ住まねばならぬとは……」

はやいうちに新しい家を調達しようと決めた男であった。

彼が家に入り、最初にしたことは赤子の世話である。

天上天下唯我独尊を地でいく男とは思えない行動であった。

「牛乳を飲むのではないのか……？」

しかし男は育児にはとことん疎かった。

だが、自分のモノを自分で管理できないなどとは自身の性格が許さず、男は育児マニュアルを片手に赤子と向かい合っていた。

「やっていられるか！ 王たるこの我がこのようなことをしなければならん！」

赤子を拾って三日目、男はついに匙を投げた。

もともとこういうことは男の得意とすることではないのだ。

今にも家を出ていこうとする男を赤子はじっと見つめていた。

「な、なんだその目は……」

多少の情が移ったのか男の足と決意は鈍った。

もつとも、男が情を誰かに与えること自体、奇跡のようなものなのだが。

「ええい！　こちらを見るな！」

男が赤子に近づくと、赤子はそれは嬉しそうにわらうのであった。

英雄王のお引っ越し（前書き）

1話1話が短いですが、何回か更新していきますのでご勘弁を……

英雄王のお引っ越し

「王たるこんなところに長々といられるか！」

男はついに我慢の限界だった。

赤子がいる手前、無理に居場所を転々としてはあらぬ不快感を赤子に与えかねない、そう考え男曰くボロ小屋（一般人にすればわりと豪邸）にとどまること約3ヶ月……

男の不満が臨界点を突破した。

「いくぞ！ 貴様ごときに気など使ってられん！」

言うなり男の行動は速かった。

荷物ひとつ持たずに赤子を腕に抱えると家を飛び出した。

それでも赤子が苦しまないように優しく抱えているあたり、男の赤子に対する情の深さが見てとれる。

そもそも男が1個体に情をかけるなど、それこそ天地がひっくり返ろうともあり得ないのだ。

それも男自身が不快感を我慢して世話をするなど宇宙が減びてもあり得ない。

にも関わらず、にも関わらずだ、男は赤子を今もお世話をしている。

これは気まぐれなどという領域を明らかにこえている。

「ふむ……及第点というところか……」

男が目をつけたのは少し古風な和風の家。

まさに『和』という感じの家であった。

「ここは今から我のものだ！」

そしてまた、男は家をてにいれるのであった。

英雄王と赤子の1日（前書き）

こんなギルガメッシュさんがいてもいいはず。

英雄王と赤子の1日

「ギー、ギー！」

「貴様……いまなんといった……？」

男は衝撃を受けた。

男が驚くことなど百年に一度とない。

それ故に男は赤子に聞き返した。

「ギー、ギー！」

「ふはは……フハハハハ！ 名前を！ 我の名前を呼んだぞ！ ただの人間ごときの赤子が！ 我の名前を！」

男、ギルガメッシュは歓喜した。

なぜこのように感情が昂るのかはわからない。

しかし、ギルガメッシュはひたすら赤子を腕に抱いて喜び、そして

……

「ふはは！ 素晴らしいぞ！ 流石ではないか！ ……！？」

そして、自分の致命的な失念に気がついた。

「こやつ……名前が……ない！」

ギルガメツシュは頭をかかえた。

なぜこのような初歩的なことを忘れていたのか、王たる自分にあるまじき失態である、と。

「仕方がない、この我自らが名前をくれてやるとしよう。光栄に思うがいい！」

フハハと高笑いをしたあと、ギルガメツシュは途端に真剣な表情になり、名前を考え始めた。

「やはり我の名前は入れねばな……ギルドレン……ギルランド……メツシュなども……」

凄まじい名前である。

こんな名前をつけられては将来、有望ないじめられっ子になることだろう。

もつとも、そんなことになれば、ギルガメツシュは全身全霊で相手を殺すだろうが……

「しまった！ こやつは冬木、日本の、東洋の人間！ 我のような名前はつけられん！」

ギルガメツシュがこの事に気がついたのは必死に名前を考えはじめてから5時間後のことである。

「ええい！ どうしろと言うのだ！ 王たる我が何故ここまで苦勞して考えねばならんだ！」

そついいながらもギルガメツシュは笑顔であつた。

すでに立派な親の顔である。

「我にここまでさせるのだ……世界一幸せな赤子よのう……」

そついつてギルガメツシュは再び思考の波に身を委ねた。

英雄王と赤子の名前

「ギール、ギール！」

「恭介、ギールではない、ギルだ」

「ギール、ギール！」

「ふっ……まだまだ幼いか……」

ギルガメッシュは三日もの間考え続け、ついに赤子に名をつけた。

恭介、それが赤子の名前である、

「我の子なのだ、地球一強い男子になろうぞ……」

最強だから強になんかつけて強介見映えが悪いから変えて恭介。

なんということだろうか、まともである。

ギルガメッシュという男が名づけたにしては気持ち悪いほどに普通である。

「おお！？ き、恭介ええええ！！ 貴様、歩けるのではないかあ
あああ！？」

「あーあー、ギール、ギール！」

はたしてこの男は本当に英雄王なのだろうか。

今の彼を見た者全員がそんな疑問が沸き上がるほどにギルガメッシュは赤子、もとい恭介の成長に狂喜乱舞していた。

正直、ギルガメッシュ自身、何故ここまで恭介に入れ込んでいるのかわからない。

だからギルガメッシュは考えることをやめた。

かつて飼い慣らしたライオンに向けた些細な情より強く固い情を恭介に感じていた。

自身の感情、唯一無二のもの、なればこそ自分がどうしようが自分の勝手。

これから先はどうなるかはわからない、途端に興味が薄れ捨てるやもしれない、はたまた情が続くやもしれない、ギルガメッシュはその時まではいままで通り情をかけてやることにしていた。

「フハハハハ、恭介は幸運なやつだ……」

「うー？」

「フン、いましばらく貴様に情をかけてやることにしよう、感謝せよ」

「あー！」

恭介は訳もわからずただただギルガメッシュの腕の中で笑うのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481y/>

英雄王に拾われし子

2011年11月4日09時14分発行